

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	田中 利奈	学校名	群馬県 伊勢崎市立赤堀南小学校
担当教科等	複数教科	対象学年（人数）	5 年（26 名×3 クラス）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025 年 10 月～2026 年 3 月（18 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域： 総合的な学習の時間・道徳		
2. 単元名と単元目標 単元名： つながる世界☆ひとりひとりが地球市民 単元目標： 日本と他国の共通点や相違点を捉え、多様性を尊重しながら、世界の国々の課題を批判的に問い直す中で自分事として向き合うことを通して、世界の人々と共に生きるために自分には何ができるか考えることができる。 関連する学習指導要領上の目標： 総合的な学習の時間：（1）探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。 道徳： 18 国際理解、国際親善 他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。		
3. 単元の評価 規準	①知識・技能	資料を用いて調べることを通して、SDGs17 目標に関する課題を抱えている国や地域を知り、そこでどんな問題があるのか、またその原因や解決策の概要を捉えている。
	②思考・判断・表現	日本と他国の共通点や相違点を捉え、多様性を尊重しながら、物事を批判的に問い直し、自分事として課題に向き合い判断することを通して、世界の人々と共に生きるために自分にできることを考えている。
	③主体的に学習に取り組む態度	問いをもち、学習を見通して、意欲的に調べたり話し合ったりすることを通して、協働的に学ぶよさを感じながら、自分事として世界の課題に向き合っている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 本校は、5 年生の「総合的な学習の時間」で SDGs をテーマに扱っている。本児童は、昨年度、SDGs とは世界の人々が「こうなったらいいな」と思うことの表れであることとして捉えた。世界の人々が大変な思いをしていたり、不自由なくらしをしていたりするその課題が、SDGs と結びついていることを把握した。 本単元を通して、児童が世界に目を向け、課題についてより自分事として、また児童それぞれが自身への問いをもち、自分には何ができるのか一緒に考えていきかった。そして、地球上に住む一人として、協力し合おうとする態度を育成したい。 【単元の意義】 本単元は、大きく以下の 4 つの展開で構成している。①児童が自分自身の興味をもった SDGs について調べる、②児童が自分事として世界の課題に向き合う、③JICA 海外協力隊について学ぶ、④自分、また自分たちには何ができるか考える、である。この構成により、「自分たちには何ができるか」考え、アクションするゴールに向かうために、現地の様子を知り、そこに住む人々の気持ちになって考えることの大切さを学んでいく。日本で生きていくと、学校に通うことは当たり前で、「学校に通った方がよい」と思うであろう。しかし、「本当にそうなのだろうか」と批判的に物事に向き合い、自分事として課題について問い直すことは、現地の人々	

	の気持ちになって考えることとして有意義であると考え。また、実際に国際協力に携わる JICA海外協力隊 の方に現地の様子や価値観の違いで葛藤していることを聞いて学びを進めていくことも貴重な体験になるであろう。児童が自分の「アクション（SDGs解決に向けた取り組み）」を考えると、何が本当に必要なことなのか、またそれに関わる人々がどう感じるのか、自分で問いながら模索していくきっかけとなるであろう。 【児童／生徒観】 昨年度は主に、バングラデシュの「情勢」「国民性・食文化」「災害」「子どもたち」をテーマに、日本と他国を比較しながら共通点や相違点を考えた。その中で、異文化を認め、多様性を尊重することの大切さや、大変な生活をしている子どもたちに寄り添い考えることの大切さに気が付き始めた。児童は、異文化については「認め合うことが大切」と捉え、もし子どもたちが仕事をしなくてもよかったら、「もっと家族や友達と楽しく過ごしたい」「もっと学びたい」だろう、と気持ちを想像することはできた。しかし、学校に行けない、仕事をしなければならぬ現状について「かわいそう」という共感的理解には至らない考えや、大変な国を救う人がたくさん「いてほしい」など、どこか遠く、人任せで他人事という感覚が残った。 【指導観】 児童が自分自身の興味をもったSDGsについて調べる段階では、児童の興味関心に委ね、調べるSDGsやそれに関連するSDGs、また気になった国や事柄について自由に選択して調べ学習を進めていく。その中で、何が課題になっているのか明らかにし、その原因となるもの、また今行われている解決策を調べる。 児童が自分事として世界の課題に向き合う段階では、海外研修で得た写真や情報を用いて、児童がタンザニアのある小学5年生になったつもりで、学校に「通う」か「通わない」か判断する。「通う」理由としては、将来の就職に繋がることを主に扱い、「通わない」理由としては、設定として与える家庭状況や学校環境を主に扱う。 JICA海外協力隊 について学ぶ段階では、JICAのオンライン出前講座 を活用し、現地の協力隊と繋がり、児童が自分たちにできることを考えるためのきっかけづくりをする。 自分、また自分たちには何ができるか考える段階では、「自分にできること」と「みんなでできること」を分けて考えていく。後者については「みんなでアクション」として、学校で取り組めることを計画し、実行していく。
--	--

5. 単元計画（全18時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	問いをもとう	「自分たちには何ができるのか」という問いをもつことができる。	- 世界のSDGs達成状況を知る。 - 日本の達成状況も知る。 「自分たちには何ができるのか」という問いをもつ。	・地球ひろば展示物
2 3 4	世界の国々の問題を知ろう	自分が興味をもったSDGsに関わる世界の国々の課題や原因、今行われている改善策を調べることができる。	1学期に調べたSDGsと同じ番号について、どこの国や地域で問題が起きているのか、課題、原因、解決策、関連するSDGsを調べる。 - 他のSDGsについても同様に調べる。 - 気になった国について、また気になった事柄について、さらに追究する。	・JICA冊子教材
5	世界の国々の問題を共有しよう	調べたことを共有して、視野を広げることができる。	・他のSDGsについて調べた児童同士で調べたことを共有する。	
6	SDG4: タンザニアの学校	タンザニアの学校でうまくいっていることや、課題を見つけ、関連するSDGsを考えることができる。	・【フォトランゲージ】タンザニアの学校について気づいたことを共有する。 ・達成できていること、できていないことの両方の観点から関連するSDGsを考える。	・ムワンバオ小学校 ・SDGsシール

7	もしもタンザニア人だったら①	タンザニアで生きる小学生の立場になって、「もしも自分がタンザニア人だったら、学校に通う？通わない？」について、自分の立場とその理由を明確にすることができる。	・はじめの自分の立場を考える。 ・タンザニアの就学率、暮らしの様子、タンザニアで働く人々、中学校への進学率、タンザニアの学校の現状などを知った上で再考する。 ・自分の立場を理由とともに明確にする。 ・同じ意見の友達と意見を共有する。	・海外研修で学んだこと ・現地の協力隊の方から伺ったお話 ・協力隊の方の質問回答内容
8 本時	もしもタンザニア人だったら②	タンザニアで生きる小学生の立場になって、他者と話し合いながら、自分事としてSDG4の課題に向き合うことができる。	・「もしも自分がタンザニア人だったら、学校に通う？通わない？」の立場で分かれたグループを組み、ディベート形式で話し合いをする。 ・相手を変えて2回話し合いをする。 ・話し合いを経て考えたことを振り返る。	・海外研修で学んだこと ・現地の協力隊の方から伺ったお話 ・協力隊の方の質問回答内容
9	協力隊を知ろう	協力隊とは何か知る。	・JICA 資料で協力隊を知る。 ・協力隊の方への質問を考える。	※JICA オンライン 出前講座申し込み
10	協力隊のタンザニアエピソード	協力隊の方の思いを知り、SDGsの達成に向けて、価値観の異なる国の人々と協力していくために大切なことを考えることができる。	【知識構成型ジグソー法】 ・協力隊の方が葛藤したエピソードから、価値観の異なる国の人々と協力していくために大切なことを考える。 ○学校…先生たちの態度、体罰の許容 ○病院…緊急事態でもスマホをいじる ○米作り…KAIZEN プロジェクトを行うことへの不満	・協力隊の方の質問回答資料（現状、葛藤、願いなど）
11	自分にできること①	これまで調べたことや学んだことをもとに、自分には今何ができるのか考えることができる。	・自分で調べた SDGs などについて、座標軸を用いて、横軸に「自分が1人でできること」「みんなでできること」縦軸に「今すぐにできること」「長期間でできること」に分類しながらできることを考える。 ・協力隊の方に聞きたいことを考える。	
12	JICA オンライン 出前講座	協力隊が世界の国々で活躍する様子や葛藤を知り、自分たちには何ができるか考えようとする意識を高める。	・協力隊の方の現地の様子や大変なことなどの話を聞く。 ・質問をして、「自分に、自分たちにできること」について考えを深める。	・JICA オンライン 出前講座
13	自分にできること②	協力隊の方の話から、自分にできることについてアップデートすることができる。	・「自分アクション」を決定し、実行する見通しをもつ。	
14 18	自分たちにできること「みんなでアクション」	「自分たちにできること」を一緒に取り組むグループを決め、グループ毎に学校でできる解決策を1つにまとめることができる。実際に活動をして振り返り、これから継続していくことについて意識を高める。	・「自分たちにできること」の考えが似ている友達とグループを作る。 ・学校で取り組むことができる SDGs 解決策「みんなでアクション」を具体的に決めていく。 ・改善に向けての活動などを実行する。 ・各アクショングループの取り組みの成果と課題を共有する。 ・これからも意識し、継続していくためにどうしたらよいか考える。	
6. 本時の展開（8時間目） 本時のねらい： タンザニアで生きる小学生の立場になって、他者と話し合いながら、自分事としてSDG4の課題に向き合うことができる。				

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (2分)	めあて「タンザニアのあの子の気持ちになって、学校に通うことについて考えよう。」 1. 前時で考えた自分の意見を確認する。 ・タンザニアのある小学5年生の立場になって、学校に通うか通わないか、またその理由。	
展開 (33分)	2. ディベート形式で、「通う」か「通わない」か意見を述べたり、質問や反論をしたりする。 ○2, 3人のチームを組み、ディベートをする。 ・ディベートの手順 ①はじめの意見を互いに述べ合う。 ②相手チームへ質問や反論をする。 ③最後の意見を述べ合う。 ・相手チームを変えて話し合う。 ○全体交流（意見についての質問・反論を全体で行う。） 例）・「通う」チームへの反論：学校の様子を見ると、クラスの数も多いし、黒板を写したり教科書を読んだりするだけの授業なら、学校に通っていても結局自力で頑張らなければならないと思うので、通っても意味がない。 ・「通わない」チームへの反論：去年勉強した「児童労働」は、雇用主の意見として、低賃金で雇えるから子どもを働かせるということがあった。子どもが働いても家族が楽になるとは限らない。	・「通う」「通わない」それぞれのチームが様々な視点から意見を述べるように、質問や反論が滞っているグループには、教師から質問や反論を投げかけるようにする。 ・各グループで討議した内容を共有したり、振り返ったりすることができるように、意見を全体で共有し、それらについて、児童に質問や反論をしてもらうようにする。児童から出なければ教師が行う。
まとめ (10分)	3. 教師がタンザニアの研修で感じたことを聞く。 ・タンザニアに行く前は、開発途上国に学校をつくれればよいと思っていた。でも、学校という場所があるだけでは通う意味がないのではないかと感じた。だからと言って通わなくてよいわけではない。と悩んだこと。 ・今回、授業で見たこと聞いたことがタンザニアの全てなのか、と投げかける。 4. 振り返り T: タンザニアの小学生の気持ちになって、学校に通うことについて考えてみて、タンザニアのくらしや学校がどうなっていくとよいと思いましたか。 C: 環境を整えることが大切だと思った。 C: 貧しいくらしをしている人たちが、ご飯が食べられて少しでも楽なくらしになっていけるとよい。 C: みんな将来なりたい職業を選べるとよい。	・ディベートの際に、児童が教師の考えに影響されないように、最後に話をする。 ・考えをもつために与えた資料や情報は、タンザニアの一部でしかなく、教師が知り得たものでしかないことを押さえる。 ・JICA 海外協力隊について学習する次時以降の授業について見通しをもつことができるように、最後に支援に繋がることを振り返るようにする。
7. 資料（教材）		

・海外研修で学んだこと ・現地の協力隊の方から伺ったお話 ・協力隊の方の質問回答内容

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

タンザニアで生きる小学生の立場になって、他者と話し合いながら、自分事として SDG4 の課題に向き合っている。(発言・ワークシート)

9. 学校外との連携 ※JICA 以外。なければ不要。

10. 学びの軌跡 (児童生徒の反応・変容, 感想文, 作文, ノートなど)

*もしもあなたがタンザニア人で、タンザニアに暮らす小学5年生だったら学校に通う?通わない?
(選択するにあたり、家族構成や家庭環境を設定した。)

「通う」理由	「通わない」理由
・正しい知識が得られる ・頭がよくなる ・中学, 高校と進学できる (したい) ・将来やりたいことが選べる ・就職して稼げる ・就職してもっとタンザニアを発展させたい ➡将来のことを考えた理由が多かった	・学校環境 (1 クラス 1 2 0 人, 教科書や文房具が揃わない, 1 0 人に 4 人しか中学に進学できない, 運動ができない (体育がない), 給食がおいしくなさそうなど) ・少しでも自分が稼いで家族を楽しみたい ・ご飯が食べられるようにしたい ➡今の生活をなんとかしたい理由が多かった
	・弟たちを学校に通わせたい

【ディベート後の振り返り】タンザニアのくらしや学校がどうなっていくとよいか。

○くらしについて

- ・食べられない人が減る, みんなが平等に食べられる ・お金や衣食住が揃う
- ・もっとたくさんお金が稼げる ・子どもが働かない
- ・子どもたちがお金や将来に困らない ・子どもたちが本当にしたいことができる

○学校環境について

- ・募金で学校をきれいに ・1 人 1 人に机がある ・給食をもっと安く ・学校, クラスが増える
- ・みんなが幸せ, 平等に, 楽しく, 笑顔で学校に行ける

○就職について

- ・みんながちゃんと就職できる ・(学校に通えない人も) 農家や大工以外の選択肢がある

○国際協力について

- ・日本, 他国, 自分が寄付をする ・先生がたくさんいる国から先生を派遣する
- ・ノートや鉛筆を配布する

<児童の意見や振り返りから感じたこと>

5 年生 3 クラスを通して, 「通わない」を選択する児童の方が圧倒的に多かった。「今, 家族を養うこと」を最優先に考える傾向が見られた。興味深かったのは, 「通う」を選んだ児童はほとんど男子だった。将来を見据えて, 家族を養うために働くのは男性だという固定観念が, 今の時代においても児童の意識の中には潜在しているのだろうか。また, 「通わない」を選択した児童も, 振り返りでは「みんなが学校に通えるとよい」, 「みんなが自分で選択した職種に就職できるとよい」, 「学校環境が整うとよい」と「通えない・学びにくい現状」をこのままにしておけないと捉えている様子が見られた。

【本時または単元について, 個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	現地の協力隊の方のお話を伺う機会がたくさんあった。どの方も、現地の方とともに働いている中で、日本人として正しいと思うことと、現地の方の思考、行動とのギャップに葛藤している姿があった。その中で、自分にできることを模索し、奮闘している姿は本当に格好良かった。これからの未来を担う子どもたちに、協力隊の存在と魅力を伝えたいと思った。 特に、自分が一番衝撃を受けたのが学校の現状だった。子どもたちが学びを得るには難しい環境を目の当たりにして、どうすればよいのかとても悩んだ。施設、設備、用具などをはじめ、現地の教員の考え方や依然として当たり前根付いている体罰。卒業後の進路、就職の問題。子どもたちを取り巻く課題が多すぎた。この現状で、子どもたちはどんな思いで暮らしているのか、現地の子どもの立場をなるべく自分事として、日本の児童にも考えてもらおうと思った。そして、その現状に立ち向かう協力隊の存在を知り、その思いにも触れ、支援の立場としても一緒に考えたいと思った。
12. 苦労した点	授業で扱う題材を決めること。自分にとって新たな発見や得た知識が多すぎて、どれも子どもたちに伝えたいことばかりだった。そして、今回自分がしなかった授業が、「児童が自分事として考え、正解のない問いについて子どもたちが思いをぶつけ合いながら議論するもの」だったので、たくさんある題材の中から何をどのように与えればよいのかとても悩んだ。
13. 改善点	児童の発達段階を踏まえ、与えていない情報がある。その情報の有無で子どもたちの考えを180度変えることもあるかもしれない。伝えるべき情報かは、発達段階によって異なるが、情報の扱いについては、今後もよく検討していきたい。
14. 成果が出た点	「学校に通うこと」について、日本人として「通うのが当たり前で、通う方がよい」という視点をもちながらも、「本当にそうなのだろうか」と、タンザニア現地の子どもの視点に立つことで、「学校に通うか通わないか」自分事として議論することができた。自分自身の学力を考え「通う」と判断するなど、タンザニアの家庭環境・学校環境から考え選択しつつも、自身の特徴も考慮しながら議論している姿があった。また、タンザニアや他の国について家庭学習で自主的に調べてきた児童がいた。国語で自分の生き方について考え作文に書いたときに、「将来タンザニアやバングラデシュのような国に行ってみたい。世界の子どものためにできることを考えたい。」という思いを書いた児童がいた。 授業内容や扱うワークシートを先生方にも体験してもらうことで広めることができた。たくさんの先生方が興味をもって回答に協力してくださった。タンザニアの学校の実態を伝えることで、日本の教育について改めて考えるきっかけにさせていただくこともできた。
15. 自由記述	これから重要なことは、この研修で実践した授業を、自分以外の先生も、児童へ伝えていけるカリキュラム、教材、指導ガイド作りだと思う。また、それを求めてくださる先生方がいらっしゃることも幸せなことだと感じる。「自分には何ができるのか」漠然としか考えていなかった自分が、教師として「この経験を繋いでいくこと」と現時点での最適解として、昨年度からも更新している。

参考資料・使用教科書： JICA 冊子教材「学校に行けない世界の子どもたち」